六、結養衛生

結養　陸地構築ノ重労働ニ対シ結養ノ徹行

セズ負相当ナル死亡者ヲ出セリ

衛生　マラリヤ患者ノ多発

赤痢　脚気患者

皮膚病　特ニ熱帯潰瘍、芥癬

七、終戦ヨリ帰還マデノ行動

終戦後一切ニ集結シ健康恢復（特ニ栄養トマラリヤノ治療）自活態勢ノ確立（人員ニ重ニ目標）

精神訓練　特ニ敗戦国日本ノ復興、道義日本ノ再建、現況ヲ国内思想ノ自ラフル解決

国体ノ護持　昭和天皇ノ詔書ノ

実践ニ直接ノ指向シ帰還ヲ待ケリ

昭和十七、四（兼武）

付2

戦史資料ハ空襲ニ基ク焼失（硫黄島）大陸長期ニ亡ク

一、兵員関係

人員自己都合勧誘人員

欠勤長期下士官

兵員者ト妻子ナル人、戦死一名、同帰国者人員四名

職員教員（別紙ノ如シ）

文人員兵籍ノ増減関係

御民人員ノ増員　昭和十年青年士官九名

布同

減員　昭和十年六月ニ下ル天皇作戦ノ迷戦死一名（准士官下士官共）

復員送ノ病死者　四五名（下士官共）

主要兵器ノ増減　昭和二十年八月　三号潜水艦一、五号潜水艦一、貨物船（帝国

自分部ニ移管ス

以上清人・鮮人・現地住民徴役ノ関係

（納富光國田弘）

八、高山族人、鮮人の使用ヒス

ロ、現地住民ハ自治作業ノ為大隊ニ於テ月約四、五十人程度使用セラレタリ

二、部隊履歴ノ概要

大隊ハ昭和十九年九月十六日留守第五十六師団ニ編成ス

六月隊補充隊ニ於テ編成セラレ九月三日同地出発 翌日ノ日より十日十四日迄鹿児島港迄ニ於テ部隊ニ戦闘準備訓練並ニ暖部隊ノ洞窟作業ヲ實施シ十月十五日鹿児島出帆 十月二十日宮古島(第中隊ハ十月九日鹿児島出発十月十五日宮古島)

爾後同島西北端、平良町西方 久松部落ノ北側海岸ニ海上挺進基地建設ヲ實施シ昭和二十年二月六日概ネ完成シ三月七日山中ノ部落附近ニ地上戦闘ノタメ移転 南地区隊長ノ指揮下ニ入リ同地域並ニ山中據点ヲ占領シ防禦施設並ニ戦闘準備ヲ開始シ三月末ニ至リ六月二十日迄 天号作戦ニ参加 主トシテ特殊飛行場修復作業ニ従事シ其後ハ陸軍ヲ主体トスル敵ニ対シ「マラソン」攻撃ヲ占領シ之ヲ工事並ニ戦闘準備ニ邁進中ニ八月十五日終戦トナリ

爾後山中ニ於テ自治作業ニ従事

三、指揮系統及変遷ノ概要

昭和十九年十月十日鹿児島出港ト共ニ第三十二軍ニ司令官ニ隷属シ昭和十九年十二月十八日沖縄ニ於テ在宮古島先島集団ニ配属ヲ命ゼラレ十月二十二日宮古島上陸ト共ニ先島集団長(第三十八師団長)ノ指揮下ニ入リ現在ニ及ヘリ

四、作戦準備関係

イ、作戦計画ノ概要

防禦方針

ロ、海上挺進基地

敵ノ如何ナル低空飛行又ハ潜入ニ対シテモ絶滅ニ企図ノ秘

(防衛研究所図書室所蔵)

[illegible]ルト共ニ敵ノ砲爆撃ハ[illegible]弁[illegible]爆雷及ビ
[illegible]ノ絶數ニ[illegible]護シ戰隊ト一心同体トナリ戰隊ノ出撃ニ
際シテハ之ヲ援護出撃ニ万遺憾ナラシムルニ努ム

ロ、地上戰斗

敵ノ和何ナル方面ヨリ上陸進入シ来ルモ一分隊一組(兵一至ル迄)
最後迄孤立シテ戰ヒ新迄ニ角攻ヲ敵戰車、迫
撃砲ノ撃滅ヲ期ス

防禦配備

(イ)海上進攻基地

人払北側海岸ニ警戒中隊ヲ置キ約千米ヲ離隔シ(但シ[illegible]
相接ス)海岸ノ断崖ヲ利用シ各中隊ハ洞窟ノ間隔ヲ約
三千米シ舟艇用洞窟、呑シ七個及爆雷、燃料
糧秣、板材、人員用ニ台シ岩盤厚サ約十米ヲ
標準トシテ施設セリ

敵ノ上陸用將軍上場ハ洞窟八個人員用二個第一線
動務中隊ノ後方隘路ノ要点ニ[illegible]自動車ノ使用保利且中
隊ニ[illegible]和戰線援護シ[illegible]地点ニ又戰隊本部及人
員用洞窟及[illegible]本部用洞窟ヲ警備中隊ノ直後ニ
施設ス

第三中隊ノ側背警戒用洞窟ヲ本部ノ側背ニ八個ヲ
構築ス

昭和十九年十月三十日起工計画人員及材料
第一班 三〇名 約一ヶ月増援
第二班 三〇名

鶴嘴、石工ツルハシ、ハイトウ使用ス

昭和二十年二月末日現在完成 爆破人員兵器ハ岩盤厚サ十米
ハ敵ノ爆撃ニ被害セラレズ 糧秣等十分用 七米

(2) 山中掩蔽

山中明治海岸北部ノ中腹ニ大隊本部ノ第三中隊(四五名)第二中

隊（四文字）[illegible]

イ、防御準備ヲ行フ、對戰車肉攻壕、鐵條網、對戰車地雷、
對人地雷、及落下傘、人員輸送機、敵部隊及特殊
[illegible]）、糧秣、弾薬、野水、炊事、衛生、救護所、
[illegible]建設ヲ施設ヲ行ヒ、充分隊ヲ以テ各施設間ヲ連
絡ス

ロ、尚皇武兵器ノ支給、併ニ肉攻部隊、設置出張陣地、
聚射爆薬筒陣地ヲ施設ス

ハ、昭和二十年三月皆想エ防衛人員、大隊長以下全員四〇〇名、
鶴嘴、石工ノミ、「ダイナイト」ヲ使用ス

ニ、昭和二十年十月九日概成、強度射撃ヲ設備、軽機量ヲ有スル各
個隊体トシ、陸上機敷部、岩盤厚子約八米ニ達ス（[illegible]）

ホ、敵艦戦機ノ爆撃ニ基ク各個隊体ハ破壊セラレ[illegible]人員
退避壕部ハ破壊セラレス

3、作戰準備ニ關スル全事項命令計畫

イ、軍統帥事地ノ設置（[illegible]）

ロ、敵ノ攻撃目標ハ宮古島、嘉手納、那覇ヲ即チ他隊ノ八月上陸ヲ、對
ス、[illegible]宮古島、嘉手納、那覇ヲ即チ他隊ノ八月上陸ヲ、對
ス、[illegible]月海軍上陸セルヲ以テ海上挺進基地ノ本然ノ任務遂行
ニ方テハ、[illegible]命ノ[illegible]ニ[illegible]命ノ未眠
不休努力セン[illegible]

（ロ）山中[illegible]

所中、[illegible]進、[illegible]急ニ敵ノ上陸、進攻企図明瞭トナリ
[illegible]ノ安ヲ計サル情況トナリ、特ニ為大隊ハ各兵種ノ混成ト
等、古[illegible]過労ハ大ニ認メラレ、夏ニ防衛陣地ノ構築
ニ最後的ノ魂ノ努力ヲ要求シ、夫ヲ作戰開始ト共ニ夜
間ハ爆雷ト[illegible]行場ノ修復作業ヲ行ヒ、逐次給食
不良トナリテ、益々体力減退セシモ、作戰熱戰ニ望ル迄、休日モ
[illegible]

（[illegible]）

4 軍需品補給状況

昭和二十年二月以降南西諸島ニ於ケル軍需品ノ補給ハ全ク絶ヘ特ニ補給作戦ハ赤兵器彈薬ニ総ヘテ卸固ニ於テ創意工夫セラレ補給ニ関シ自給作業ニヨル自給ノ重要性ハ昔話ニ生命ニ代ヘシ制度ニ自特等基本的補給ハ海軍ニ於テ

陣地内ニハ兵器等弾薬ハ野戦貯水池ノ野水ヲ導キ水ノ貯蔵ヲ行ヒ糧秣ヲ合今隊迄分配地ニ集積シ長期作戦ニ遺憾ナキヲ期シタリ

自治作業ニ努力セル結果終戦後ハ地区迄寺ヨリ給養ニ保持シ得タリ

5 訓練

訓練ハ敵況ニ即シ戦闘準備ヲ陣地構築ニ注ヲ向足ヲ利用シテ防御戦ニ対スル攻撃ニ訓練ニ重点ヲ置キ一週一日宛二

編成時ハ六三日連續部隊ニ練合制度又蔵能ハ特ニ組ノ戦中及後ハ各種ニ在勝ノ訓練ニ進ミ連隊ニ於ハ一般ニ能ニ

敵練ハ特ニ神風ニ或ハ特攻ニ如ク敵ハ各隊ハ

能ハ場ニ接シテ敵ハ特ニ戦闘ニ

練ハ特ニ訓練ニ

戦ハ沖縄ニ

沖縄作戦ニ為ハ

場ハ復作業ニ

四日戦艦ハ

東南側ニ近接シ中及海軍飛行場ニ対シ約四十分ニ亘リ艦砲射撃ヲ実施セリ

沖縄作戦開始以来敵機ハ空襲ノ為多数ノ延ベ出撃機

（防衛研究所）

[illegible]ヨリ約百機ニテ爆撃猛撃ヲ加ヘ飛行場ヲ始メ逐次其
間隙ヲ縫ヒ全般ノ陣地ニ及ベリ山中壕点ハ船行場ニ
達セル風森上陸ヲ阻ム[illegible]
[illegible]敵機ノ爆撃ハ相当数ニ上リ其爆撃壕ニ及ボシ
我ノ落下傘降下ヲ見ル捕虜ヲ捕ヘタルモノ等ニモ之ヲ
処理ハ総ベテ軍団司令部ニ於テ實施セリ

六、給養 衛生

給養ハ昭和十九年十月二十二日富士島上陸後約二ヶ月間
[illegible]地ヲ携行糧秣ヲ以テ食ス為普通ニ行シモ尔後
逐次不良ナリ 特ニ昭和二十年一月以降内地ヨリ輸送ス
ル給ヘタルヲ以テ中絶ス戰闘部隊ト共ニ食ハ過半
[illegible]給養ハ[illegible]四月後ヨリ逐次衛生成績ヲ良ナリ
五月頃ヨリ[illegible]及マ[illegible]ヲ[illegible]
終戰後ニ於ケル精神的[illegible]ハ

一ヶ月ノ死亡者十四名ヲ出セリ 終戰後ハ特ニ各種ノ方面ヲ講シ
衛生、給養ノ向上ニ努メタル結果 十月ニ入リテ漸次死亡者ヲ
減ジ十月ニ入リ概ネ体力ヲ快復セリ
尚終戰後 現地ニ於テ警備ニ任シ武器ノ返納ヲ行ヒ
自活作業ニ專念シ衛生、給養ノ向上ヲ計ルト共ニ新
日本建設ニ関シ教育ヲ實施セリ

將校職員表　海上挺進基地第三十大隊

本部			勤務中隊			整備中隊		
本隊	(歩)少佐	藤倉長太郎	第一	(歩)大尉	神田幸男。	(輜)大尉	伍ノ木盛夫。	
大隊附	(歩)大尉	許斐次夫。	一	(騎)中尉	緒方甚助。	(輜)少尉	山下啓右ヱ門。	
〃	(輜)大尉	伊豆利雄。	中	(工)中尉	宮島更子郎。	技大尉	藤岡武夫。	
〃	(歩)大尉	三宅章。	隊	(歩)少尉	觀山恭。	備	下戦勲ハ戦隊勤務者ヲ示ス。本表者ハ兵種ヲ示ス	
〃	(歩)中尉	畠中傳藏	第	(工)中隊長大尉	東島科次郎。			
戦勲(騎)少尉		野中壹二	四中尉		奥村新作。	考		
大隊附(主)大尉		中山惇。	中	(歩)少尉	革場初雄。		下昭和二十年生	
戦勲(主)大尉		宮原五郎。	隊	(輜)少尉	長谷川貞夫。			
大隊附(軍)大尉		福田如圓。	第	中隊長(輜)大尉	重富俊平。		月一日現在調ト又	
戦勲(軍)少尉		大塚敏。	三	(四)中尉	宮崎勝洪。			
			中	(歩)少尉	平賀常吉。			
			隊	(砲)少尉	松田吉之助。			

（防衛研究所蔵）